

努力論における否定性

——弁証法的ベルクソニズムの可能性——

竹 内 勇 記

はじめに

——自己超克としての努力——

ベルクソンという哲学者は様々な努力について語っているが、この哲学者にとっては、いかなる努力も創造の努力に還元できるように思われる¹。このことと関連づけながら、我々は本論文で彼の努力論に内在する否定性と逆説性を明らかにしたい。

議論の出発点として、彼の努力論を象徴していると思われるある箇所を紹介したい。1911年に行われたある講演（「意識と生」）の一節である。

[……] [A] 物質(matière)は努力(effort)を引き起こし可能にします²。

1 例えば直観の努力（『道徳と宗教の二源泉』、「哲学的直観」など）、生命進化の努力（『創造的進化』）、知的努力（「知的努力」）など。しかしここで、直観の努力は創造の努力とは言えないのではないか、という疑問が出てくるように思われる。後述するように、知的努力を中心に論じる本論文では直観の努力を本格的に扱うことはできなかったが、少なくとも神秘家の直観（『二源泉』）は創造であるとされている。また、哲学的直観の努力も表現のそれと緊密な連関を持っている限りにおいて創造としての努力に繋がるのではないかと我々は考えている（第1,4節を参照）。確かに、知的努力とそれ以外の努力との関係、すなわちベルクソンの努力論の全体像を明らかにするためには、より網羅的な精査が必要であろう。しかしそのためにも、本論文において知的努力の分析を中心にしつつ、努力における否定性や自己超克（後述）の内実を解明することは、有益であるに違いない。

2 以下、引用文中の下線強調は全て論者によるものであり、また、論者による補足は〔 〕内に、中略は[……]で示す。

思惟されただけの思想，着想されただけの芸術作品，夢想されただけの詩には，まだ苦勞（peine）しません。詩を言葉に，芸術的着想を彫像あるいは絵画へと [B] 物質的に現実化すること（réalisation matérielle）こそ，努力が要求されるのです。努力は苦しい（pénible）ものですが，努力が生み出した作品と同じくらい尊い（précieux）ものです。それどころか，作品よりも尊いものでさえあります。なぜなら努力のお陰で，[C] 人は自分の持っている以上のもの「自分に無いもの」（plus qu'il n'y avait）を自分の中から引き出し，自分自身を高めた（s'est haussé au-dessus de soi-même）わけですから。ところで，この努力は物質なしには可能ではなかったでしょう。つまり [D] 物質は，「私たちに対して」対置する抵抗（résistance）と私たちが物質を導きうるという従順さ（docilité）によって，障害（obstacle）であると同時に道具（instrument）であり，そして刺激（stimulant）なのです。（ES. 22）

第一に，努力は自己創造，自己超克を可能にするからこそ価値があるとされる（[C]）。一見すると，このこと自体に問題はないように思われる。だが「自分の持っている以上のもの」には，虚辞の *ne* が含まれていることに注目しなければならない。フランス語に見られる虚辞の *ne* は潜在する否定性を反映するものであり³，従って例の表現には未だこれまでの「自分には無かったもの」という意味が暗示されている。ベルクソンはしばしばこうした語り方をするのであるが⁴，しかし何も無いものから何かが生まれるという無や否定についてのこうした見方は，まさにベルクソン自身

3 『新フランス文法辞典』，朝倉季雄著，白水社，2002 年，p. 315

4 否定あるいは無を直接的に明示しているものとしては，「自己による自己の創造（*création de soi par soi*），すなわち少ないもの（*peu*）から多くのもの（*beaucoup*）を，無（*rien*）から有（*quelque chose*）を引き出す「……」努力による人格の増大」（ES. 24）という表現がある。虚辞の表現を用いたものとしては，「「……」まさに精神（*esprit*）とは自分が含んでいる以上のもの（*plus qu'elle ne contient*）を自身から引き出し，自分が受け取る以上のもの（*plus qu'elle ne reçoit*）を返し，自分が持っている以上のもの（*plus qu'elle n'a*）を与えることのできる力なのだ」（ES. 31），など。

また，「意識と生」以外のテキストにも同様の主張が見られる。「精神が自分自身の中から自分の持っている以上のものを引き出すこと（*plus qu'il n'a*），精神性とはまさにそうしたことにあること，そして精神が染みこんだ実在が創造であるということ，を，直観は見，そして知っているのである」（PM. 31）。

が『創造的進化』第4章で錯覚とみなし批判した見方であったはずであり、この非難が正当であるならば、件の自己超克に否定性を認めることはできないのではないかと——これが最初の問題である。

次に、この[C]は芸術家が作品を作るように物質的な現実化を果たそうとすること([B])の結果の關係にあり、さらにこの[B]の努力は物質がなければ不可能である([A])。従って、物質は創造にとって障害であると同時に道具でもあるのであって、「刺激」という言葉はこの両義性、逆説性を意味しているわけである([D]⁵)。

ここで問題としたいのは、[C]と[B]の關係である。[C]の創造は自己である主体(sujet)に向けられているといえるのに対し、[B]のそれは対象(objet)へと向けられており、それ故両者は相容れない關係にあるはずであるが、しかしそれにも拘わらず[C]は[B]によって可能となるとされているのである。これはどういうことだろうか。少なくとも我々はこのことを全く理解できないわけではないだろう。というのも、経験はまさにそのことを示唆しているように思われるからである。そうであるならば、我々に課されているのはこのような経験の哲学的解明である。さて、[C]に注目してみると、[C]は[B]との關係からして直接的、自足的には実現されず、必ず物質による媒介が必要であることがわかる([A])。これは[C]が[C]そのものから離れることによってしか自己を肯定できない、ということである。とすると、[C]はそれ自身矛盾を含むことになり、[D]が持つ矛盾ないし逆説は[C]のその裏返しでもあると言えるだろう。だからベルクソンにおいて努力を伴う創造とは単なる付加による増大では当然ありえないし、しかしかといって、排除や離脱といった在り方だけを意味するような、いわゆる脱自のような否定性でもないのである。つまりこの哲学者にとって創造とは、肯定か否定か、連続か断絶かというような二者択一によって明確になるものではなく、むしろ逆説的なものなのである。この逆説性をどう解するかが、第二の問題である。

5 この[D]の命題、すなわち障害であると同時に道具でもあるという物質の両義性あるいは矛盾は、ジャンケレヴィッチ(Jankélévitch)が多くの著作で度々言及してきたものである。ここでは以下の一冊だけを挙げておく。Henri Bergson, 2e éd., Quadrige, 1959, pp. 167-168, 170

従って以上の二つの問題の関係、すなわち創造的努力の否定性と逆説性
 の関係を解明することに、ベルクソンの努力論の核心は存する。

1 否定の二重性

そこで、第一の問いから検討するために否定に関する考察が必要である。
 ところで前述したように、『進化』第4章では否定と無が批判的に述べら
 れていた。だが他方で忘れてはならないのは、「哲学的直観」（『思想と動
 くもの』所収）においては、直観の持つ否定の力が積極的に評価されてい
 る、ということである。これはどういうわけなのか。否定性の議論はこの
 ように錯綜しており、少しずつ解きほぐしていかなければならない。そこ
 で我々としては、まず前者のテキストを考察することから議論を始めたい。
 というのも、この『進化』第4章でなされる無と否定の分析は、実践的
 関心の下になされているとはいえ、非常に論理的、判断論的な性格を持
 つものであることから、いささか形式的ではあるが、否定作用の有する機
 能と構造を抽出することができるように思われるからである。ただし念の
 ために言っておくと、このことからベルクソンにおいて純論理的、純認
 識論的な問題がありうるということには決してならない。具体的生の場面
 の研究こそが彼の哲学の核心であり、彼が同著作の序文で述べているよう
 に、「認識の理論と生命の理論は互いに区別できない」（EC. IX, 強調原文）
 からである。我々が問題にするのは、あくまで創造の努力における否定性
 であることを忘れてはならない。この前提を踏まえる限りにおいて、否定
 に関する『進化』第4章と「哲学的直観」の間の位置付けの相違と共通
 点の意味が把握できるだろう。

さて、ベルクソンが無の観念の分析において「始めに無があり、存在
 は後から加わったのだ」（EC. 276）とする考えを誤りとみなすのは、無
 や空虚というものが存在や事象を先に前提した上でそれを排除すること
 によってしか得られないからであった。「私の言う空虚とは、それ故結局
 のところ特定の対象の欠如でしかない [……]」（EC. 281）。それ故否定
 は論理的順序から言えば、既にある「特定の対象」の存在を肯定した上

で、それを排除するという二重の作業から成り立っていることになり、その結果否定には肯定よりも多くの内容があるということになる (cf., EC. 286). そのようなわけでベルクソンは、否定だけを肯定から独立しかつ自己充足したものとして想定したり、あるいは無から有を、不動から運動を構成したりすることが誤りであると主張するのである。とすると、当然のことであるが、否定の作用それ自体は誤りでは全くない。そして、我々が問題にしている自己超越という創造における否定作用も、全く何もないところから始めるわけではない。後述するが、それは既にあるものに対し「修正」や「利用」といった仕方で、何か別のものに置換する作業を加えることによるのである。だから先の引用文中で語られていた「無から有を生み出す」という表現を、文字通りに受け取ってはならないことはさしあたり確かである。

そこで、否定作用を構成する先の二重性についてさらに検討してみたい。この二重性は二重の肯定判断を意味していた。だが、無や空虚の観念以外の否定作用に関しても、我々はそもそもどうしてわざわざ判断を一回で済ませずに二回行わなければならないのだろうか。まず言えるのは、この二段階の判断はあくまで論理的に分解された順序であって、実際には同時的に（一挙に）なされるものであるということである。これを踏まえた上で、このような二重の判断を経てあるものを表現するということはいかなることなのか、ということを考えねばならない。少なくともそれは、最初の肯定判断を下したある既存の明確な対象において捉えられなかった別の対象についての何らかの表象を持っていたのでなければならぬはずである。だからこそ、前者の対象に対して排除が加えられたわけである。例えば私が「その机は白くない」と発言することで意図しているのは、「その判断が別の判断によって（もちろんこれは不定な (*indéterminé*) ままに放置しながら）置き換えられなければならぬ (*remplacer*)」ということであり、その結果「別の判断」は「不定」なものにとどまり、「間接的に (*indirectement*)」しか事象を指示しない (EC. 287)。

従って否定作用とは一種の置換 (*substitution*) の機能を果たすものである。「あるものの排除 (*supprimer*) とは他のものでそれを置き換える (*remplacer*)」ことであり、あるものの欠如を考えるためには、何か他の

ものの現前を多少とも明瞭に表象するほかに、要するに抹殺 (abolition) とは何よりもまず置換を意味する「……」(EC. 283). だが逆に言うと、不明瞭で漠然とした第二の判断内容は、まさにそれが不明瞭で直接的に言い表すことのできないものであったために、否定という仕方ではか言い表せなかったものなのである。

ところで、新しいものをつくるということは、まさにそうした不明瞭な表象（後述するが、これは哲学的直観にも当てはまる）を手がかりに何とかそれを具体化させようとする試みではないだろうか。然り。ただしここで、『進化』第4章と「哲学的直観」との間に、否定の際にどのような態度の違いがあるかを明記しておかねばならない。つまり、前者が論じる否定の場面は現実的関心 (*intérêt actuel*) にあるのであって、さらに言うとそれは失望や後悔としての否定なのである。「無秩序の観念はある期待 (*attente*) に対するある失望 (*décéption*) に対応していて、あらゆる秩序の不在を表すのではなく、ただ「自分にとって」現実的関心を引かない秩序が現前しているということを表しているにすぎない」(EC. 274). 先の例に戻るならば、「その机は白くない」と私が言うとき、「さしあたり白という色だけが我々の関心事なので、私はただ他の色が白に代えられるべきだと告げれば良く、その色が何色であるかは言う必要がない」ことになる (EC. 288-289). こうして『進化』第4章における置換としての否定作用は、未知であったり曖昧であったりする第二の判断よりも、明晰判明で実践的関心のある第一の判断の方に注意が向けられるのである。このような態度は、「古いものを新しいものの場所に留めておきたいという精神」(EC. 282) に基づく態度であるが、しかしこれは努力なき態度である。「……」努力なしに理解するということは新しいものを古いもので作り直すことである「……」(PM. 31).

これに対し、創造の努力を伴う態度における否定はその関心が逆にあるように思われる。すなわち、不明瞭な第二の判断内容の方に関心が向けられていると思われる。ある構想を具現化するために努力することは一種の試行錯誤と言えるが、そのような場面において、我々は様々な対象に対してああでもないこうでもないと言いながら、何とかその構想を実現しようとするものだ。「この机は白くない」という先の命題を、敢えてこうした

努力の場面に置き直し新たに読みかえるならば、そのように言うことによって発話者は何とか自分の直観にある白を表現しようと苦心していることになるだろう。

このように、我々が問題にしている創造の努力というのは、直接的な利害関心からまさに離れることによって可能になるものではなかっただろうか。『進化』第4章以前に、知性の特徴は道具や人工物を製作、発明することであると述べられているが (chap. II, etc.), 知性が道具を製作するのは、本能のように特定の対象のみに対して直接的な利益を獲得するためではなく、むしろあえて回り道をすることによってより多くの利益を得ようとするためであった。

本能は自身の射程内に (à sa portée) 適切な道具を見いだす。[……] それ故本能は、特定の対象に対し特定の道具を使うだけなので、どうしても専門化されている。反対に知性が作る道具は、不完全な道具である。それは努力を払わなければ入手されない。[……] それは自然の道具に比べて直接的要求に対する満足という点では劣るが、要求が差し迫るものではなくればそれだけ利点が増す。(EC. 141-142)

努力とは、求めているものが遠いところにあって、その隔たりを何とか埋めようとするところにある。そのため努力の態度とは、身近な利害関心にこだわる態度から離れなければならない。このことを踏まえるならば、『進化』第4章における否定の議論は、努力という態度において改めて捉え直すことが可能であろう。つまり、否定における第二の肯定判断の内容は、努力によって注意を向けることが可能となるであろう⁶。

そこで今度は、「哲学的直観」における否定性に目を向けてみたい。

この点「哲学的直観」には、無限に単純な、並外れて単純なために哲

6 ジャンケレヴィッチもベルクソンのテキストを引用しつつ、否定に同様の性格を認めている。彼は否定作用を「浮き彫り効果 (effet de relief)」とか「間接的に我々の選択を啓示するもの (indirectement révélateurs de nos options)」として読み込む。Le Paradoxe de la morale, Seuil, 1981, p. 95

学者が決してうまく言い得なかったものがあります。だから哲学者は一生をかけてそれを論じました。彼は自分が言い表した文句を訂正し (corriger), それからその訂正をさらに訂正しなければならないと感じることなしには, 自分の精神のうちにあるものを言い表すことができなかったのです。それ故, 理論が完全になると信じているのに, 理論から理論へと訂正が加えられることによって, 複雑さが複雑さを呼び, 説明に説明が並べられ, 彼は元の直観 (intuition originelle)の単純さを次第に大きくなる近似値でしか表せなかったのです。(PM. 119)

哲学者にとって, 理論や学説を訂正しながら繰り返し新たな主張を述べていくことによってしか「元の直観」に辿り着くことができないということ, こうした媒介性こそ, 先の分析において明らかになった置換としての否定性なのである。ということはつまり, 否定におけるこの置換は『進化』の場合にも「哲学的直観」の場合にも共通する基本的な構造といえるのである。従って, 第二の肯定判断を第一のそれよりも本質的とみなし, 両者を切り離して考えることは誤りである。直観が学説の訂正によってしか辿り着けないように, 自己創造は自己を離れて他のものを創造することによってしかありえない。それ故媒介としての否定が前提する〈置換するもの〉と〈置換されるもの〉の二元性は, 互いに逆説的な関係にある。これは自己超克にとっても本質的であるといえるのである。

そこで自己創造の様相を明らかにするためにも, 今度は自己ではないある対象を創造する努力の場面について, さらに掘り下げてみなければならない。前述したように, 『進化』(1907年)で論じられていた知性による製作や発明は対象の創造を意味するものであるが, ここではさらに遡って, 「知的努力 (L'Effort intellectuel)」という論文(1902年)で分析されている知性を問題にしたい。というのも, ここでは知的創造の努力が「動的図式 (schéma dynamique) とイマージュ (image) の二元性」(ES. 187)として論じられているからであり, やはり努力にとって二元性が本質的なものとされているからである。そこで我々が取り組むべき課題は, 動的図式⁷とイマージュの二元性を, 否定における置換の二元性と比較対照しつつ解明するということになる。

2 図式とイメージの往復

最初に、「知的努力」の中で挙げられている、ワルツの運動を新たに習得するという努力を例に考えてみたい。

ワルツを学習するということは、多様で既に古くなっている (anciennes) 運動感覚のイメージの新たな体系化 (nouvelle systématisation), それらのイメージを皆図式の中に組み込ませることができる体系化を獲得するということにある。(ES. 180)

この場合、訂正されるのは、「古くなっている運動感覚のイメージ」、すなわち身体の習慣である。そしてそれによって追求しようとしているのが、新たに「体系化」された運動感覚、すなわちまさに覚えようとしているワルツの動きである。自覚的であろうとなかろうと、この古い習慣から抜け出す努力なしに、そしてそれを変容させることなしに、新しい動きを習得することはできない。この意味で、件の努力は古い習慣としてのイメージを新たなイメージの体系へと置き換える試みである。つまりワルツの運動という目指すべき目標は、古いイメージを否定することによって定立されることができる⁸。これが努力の始まりである⁹。

この努力の過程にあるとき、覚えようとしているワルツの動きは現実化しようと思われているところのものであって、文字通り実在しているわけではない。それは目標であり、何か抽象的で漠然とした観念ないし表象

7 ところで、ベルクソンにはもう一つの「図式」、すなわち「運動図式 (schème moteur)」(『物質と記憶』) という概念が存在する。動的図式と運動図式の比較、さらに schéma と schème の比較については、既に瀧一郎による詳しい先行研究がある。「努力の機構——ベルクソンにおける『運動図式』と『力動的図式』——」(『研究』No. 10, 東京大学文学部美学芸術学研究室, 1992年3月, 168-185頁)を参照。

8 例えばバシュラール (Bachelard) は、ベルクソンにおけるこうした側面を強調する。「[……] 新しい経験 (expérience) が古い経験に対して否 (non) と言う事実を自覚しなければならない。このことなしには新しい経験が問題にならないということは明白である」(La Philosophie du non, Quadrige, 1940, p. 9)。

9 「『日曜散歩』反復や模倣、盲従するには、なすがままにしておくだけで十分である。努力を要するのは批判を加えること (critique) である」(MR. 143-144)。

のようなものであり、要するに非実在的な仕方であるようなものなのである。それ故ベルクソンはこれを図式と呼ぶ。これに対し、古い習慣としてのイマージュの方、例えば「歩く」とか「つま先で立つ」とか「回転する」といった動き (ES. 180) は、既に身に付いているところのものであり、この意味でそれらは実在的である。この点からすると、図式とイマージュの関係を伝統的な概念を使って、「形相 (forme)」と「質料 (matière)」の関係に比すことができるだろう (ES. 171, 182)¹⁰。

ところで、イマージュは全て排除されるわけではない。というのも、ワルツの動きに合うように、それら様々な習慣としてのイマージュを「修正し (modifier)」, 「ねじ曲げて (infléchir)」, 「利用」しなければならないからである (ES. 180)。序文で論じた物質の両義性に注目するならば、「知的努力」におけるイマージュもまた物質であり、それ故古い習慣はワルツの動きの獲得にとって障害であると同時に、利用すべき道具でもある¹¹。これが「新たな体系化」であり、イマージュを「図式に組み込ませる」ということの意味である。

10 しかし一般的に、ベルクソンは実在論者であり、形相とか形式といった非実在的なものを認めない立場にあると考えられているのではないだろうか。例えばメルロ＝ポンティはベルクソンをまさに実在論者として非難する。Merleau-Ponty, *Phénoménologie de la perception*, Tel, 2005, p. 326n [旧版は p. 319n] を参照。

確かに、ベルクソンはしばしば形式や図式を拒絶する。例えば概念としての図式 (schéma) は、「知的努力」の翌年 (1903 年) に「形而上学入門」の中で批判されているし、プラトンのアイデアやアリストテレスの形相は、5 年後 (1907 年) の『創造的進化』の中で非難されている。それ故ベルクソンが実在論者であるという見立ては妥当であり、「知的努力」において図式論を展開することは矛盾しているように思われるのである。ただ、注意しておかねばならないのは、どちらの場合にも形相や図式は、これから論じる動的 (dynamique) 図式の場合のように、ダイナミックなものとして想定されているわけではないということである。それらはむしろ「不動な (immobile)」(PM. 200) とか、「不変な (immuable)」(EC. 314) というように形容されて、それぞれ扱われている。

しかしそれでもまだ、動的図式論は実在論的ベルクソン像と食い違っているという疑問が拭い去られたわけではないのではないかと。然り。要するに我々が提示したいのは、件の図式とイマージュの関係が、実在論的か観念論的かということではなく、新たな二元論である、という観点なのである。

11 物質性としてのイマージュのこの逆説性は、具体的に以下のような取捨選択の作業を要求するだろう。「表象が他の全ての表象から孤立するのは、イマージュを組織化する図式が、その図式を展開できないイマージュを締め出す (*rejette*) からである。そして他方、表象がますます多くの細部で満たされるのは、図式の展開がこの図式に同化しうる全ての記憶やイマージュを吸収すること (*absorption*) によってなされるからである」(ES. 185)。

このように、図式とイメージの間にはある種の逆説性が存在する。努力はまず古いイメージを否定し別の目指すべきもの（＝図式）に置き換えるにも拘わらず、その図式に何とかそれらのイメージを重ね合わせようと試行錯誤する試みなのである。

ところで、このダンスの動きの例は「身体の努力」（ES. 178）であって、知的努力とは異なるのではないか——このような疑問が予想されるが、しかし後者の努力も図式とイメージの二元性を前提するのであり、両者は同じ構造を持つとされる（ES. 181）。例えば問題を解決したり何かを発明する場合にも、まず図式が立てられねばならない。

「まず最初に」問題を解決されたものとしてみなければ、どうやって解決できるだろうか。[……]「まず最初に」理念（idée）すなわちある得られた結果（effet）を表象して、それからこの結果が諸要素のどのような構成によって得られるかを追求するのだ。完全な成果（résultat）に、実現すべき目的（fin）に、[まず最初に]一気に（d'un coup）移る。全ての発明の努力は、それから飛び越した隔たりを埋め（combler l'intervalle）、今度はその目的を実現させる繋がった糸を辿って、その同じ目的に再び（de nouveau）到達する試みである。（ES. 174）

問題を解決するために、まず「問題を解決されたものとして」みるのでなければならぬということ、これがイメージから図式への飛躍である。これは結果の「先取り（anticipation）」¹²ともいうべき事態である。努力はこの先取りをした上で、改めてそれを様々な要素によって埋め合わせて具体化させることにあるのである。従って、知的な努力にも身体の努力にも、既にあるイメージからの飛躍が存在するのであり、その飛躍によって立てられた漠然とした表象をイメージによって具現化することが要求

12 この言葉自体はメルロ＝ポンティから引いたものである。彼はベルクソンにおける知覚について、その対象に対する自己の身体の可能的行為を反射するものであるということ（MM. 15-16）から、「身体によって行われる先取り」と表現する。知覚という認識（＝行為）も同様に、知的努力のひとつであると言えるだろう。Merleau-Ponty, *L'Union de l'âme et du corps chez Malebranche, Biran et Bergson*, Vrin, 2e éd., 2002, p. 84

されるのである。だから身体の努力も含めて、こうした一連の働きは思惟の働きによってなされると言えるだろう。それ故両者は「互いに解明し合う」(ES. 178) とさえ言えるのである。

確かに知的な努力というのは知性 (intelligence) による努力、すなわち知性的認識の努力であり、「精神の (mental) 努力」であることを意味する (ES. 184, 185, 189)。しかしそれは、認識のレベルだけに留まることを意味しない。既に引用した表現を使って言えば、「認識の理論と生命の理論は互いに区別できない」(EC. IX, 強調原文) のである。そうであるならば、先程我々がワルツの動きの習得という日常的で身体的な場면을例に扱ったからといって、我々が努力の問題を論じるべき場所を軽視している、あるいは論ずべき場所として適切ではない、ということにはならない。むしろ、ワルツの分析から浮かび上がってきたのは、図式とイメージの隔たりを埋めるという、努力における運動や実践の重要性なのである。

ところで、両者の隔たりを何とかして埋め合わせようとするためには、イメージの方を訂正、修正するだけではなくて、図式の方に手を加えることも時には必要だろう。「図式は、図式がそれによって満たされようと努めるところのイメージ自体によって修正される (modifié)」(ES. 175)。「図式はイメージへの展開を獲得するために己自身を修正 (se modifier) しなければならないことがありうる」(ES. 181)。動的図式が文字通りダイナミックであるとされる理由の一つは、まさにこの点にある。だからそれは、例えばプラトンのアイデアのように確固不動で絶対的なイニシアチブを持つものではないのであり、むしろ常に修正が加えられていくある種の「仮説 (hypothèse)」(ES. 171, 172, 173, 176, 185) のようなものである。図式とイメージの間には、図式のイメージに対する作用と、イメージの図式に対する作用の両方が存在するのである (cf., ES. 167, 176, 182, 184, etc.)。

このことから、図式とイメージ間のこのような往復作業が否定性すなわち置換を意味しているということが出来る。ただし、努力はこの置換によってなされたある項から別の項への移行で完結するものではない。それだけではまだ、「思惟されただけの思想、着想されただけの芸術作品、夢想されただけの詩」(ES. 22) でしかない。努力が努力であるのは、繰り返し

返すように、そのようにして定立された二項が互いの隔たりを埋めようとせめぎ合うことにあるのである。

3 図式とイマージュの争い

そこでこの「せめぎ合い」の場面を、もう一度ワルツの例から考えてみることにしたい。先の引用の続きで、ベルクソンは次のように述べている。

[...] しかし、古い集合は新しい集合と争う (lutte contre)。例えば歩く習慣はダンスを踊る試みに逆らう。[...] ダンスの図式が適切なイマージュで満たされることが直ちに (du premier coup) 成功するということはないのである。図式が多くの要素的イマージュをそれらイマージュ間の新たな和解 (modus vivendi) へ少しずつ (graduellement) 導くよう迫られる必要性によって、遅れ (retard) が引き起こされる。[...] この遅れによって、骨の折れる試みと容易な実演との間の隔たり (intervalle)、運動の学習とこの運動そのものとの間の隔たりが測られるのではないか。(ES. 180)

そもそも古い習慣としてのイマージュは、ワルツの理想的な動きの表象としての図式にはじめからぴったりとハマることはありえない。もしそれがありうるとすれば、その人は既にワルツの動きを習得しているのであって、もはや努力の必要はない。だからこそ、古いイマージュの「新たな体系化」という努力が必要なのであり、当のイマージュはその試みに抵抗するのである。我々が努力をする際の苦しみや辛さ¹³は、このように図式とイマージュが合致しようとしている場面において、すなわち両者の「争い」や「摩擦」の場面において経験される。それ故両者は要する努力が大きければ大きいほど簡単に重なり合うものではなくなるのである¹⁴。努力

13 pénible (ES. 181), laborieux (ES. 186, 187) といった形容詞や, éprouver une gêne (ES. 177) という表現に注目。これとは反対に、「知的努力」において努力の喜びや楽しさを表す表現は全くみられない。我々の考えでは、恐らく努力にとって苦しみというのは本質的な意味を持つように思われる。

とは、図式とイマージュが互いに作用し合いながら、すなわち「理想」と「現実」をつき合わせながら、両者の〈和解＝妥協点〉(modus vivendi)を見いだすことにある。そして、図式とイマージュのこのような「争い」や「遅れ」は、我々の意識状態に、ある独特な躊躇(hésitation)となって現れる。というのも、図式とイマージュの間を行ったり来たりしている間は、まだ「試行錯誤(tâtonnements)」(ES. 181)の段階であり、目指す目標が実現されていない状態であるからだ。「この全く特殊な躊躇において、知的努力の特徴が見いだされるに違いない」(ES. 177)。「知性のこの逡巡(indécision)は、身体的不安に続いている」(ES. 183)。既に明らかにしたように、図式とイマージュの戯れは、まさに実践であり行為である。そうであるならば、この躊躇はただの優柔不断とは全く異なっているものでなければならない。むしろそれは図式とイマージュの争いなのであり、既に努力を自ら進んで引き受け実践してしまっているのである。この意味で、努力の実践はある種の決断でもあるといえる¹⁵。まさに努力をしているときというのは、苦しみやためらいのある状態であるが、我々はそれに敢えて飛び込んだのであり、そうであるならばこの決断ないし覚悟は、自身の生の在りかを努力という場面に見定めることへの価値論的同意でもある。これとは反対に、もし努力に伴う争いや苦しみに耐えられないのであれば、努力を放棄すれば済むことであるが、しかしそれは自身の生に対する逃走であり、決断や実践の回避になろう。

14 しかしながら、「相互浸透」とか「過去の自動保存説」(EC. 5, etc.)といったベルクソンの主張は、しばしばこのことに対して誤解を生み出す原因になっているようにも思われる。つまり、それらの主張が図式とイマージュの合致という事態を、あたかも容易で当然のことと思ひこませているところがあるように思われるのだ。こうした誤解を避けるためにも、これから論じていくように、努力にとって互いに矛盾し合うものの対立、せめぎ合いは本質的なものであるということが理解されなければならない。

15 ところで、決断という言葉は、ハイデガーの「先駆的決意性(vorlaufende Entschlossenheit)」を連想させるが、ハイデガーにとっての決意とは死によって照らし出されるものであった。つまり、「死への存在」であることの自覚とその「不安」が己に切迫してくることが、決断を可能にするのである。ということは、ハイデガーにとっての決断は死のおかげである、という見方も可能であろう。一方、我々がベルクソンにおいて問題にしたい決断には、ハイデガーにおける死のような、決断を促すきっかけとなるようなものは存在しないのであろうか。この点についてはさらに検討が必要であるが、ハイデガーにとっての死が逆説的な意味を持つものであることに注目するならば、少なくともその点で我々が明らかにしようとしている努力の逆説性との関連を探る余地が与えられていることになるだろう。

こうしてみると、努力とはひとつの弁証法にはかならないと言えるのではないだろうか。確かに、純粹に判断だけを問題にするような否定にとっては、置換による二つの肯定判断しか問題にならず、両者の間に内的な連関は見出せない。しかし努力における否定にとっては、そのような在り方にとどまるものではありえず、むしろ置換によって定立された二項は互いに争い合う。努力の生は「闘いの生 (*vie de lutte*)」(ES. 27) となるのである。

4 二元性と逆説性

ここまで、対象の創造としての努力である知的努力における否定性を論じてきた。今度は以上を踏まえた上で、対象創造の努力と自己超克の努力との関係がどのようなものであるのか、すなわち序文で挙げた逆説性を問題にしていかなければならない。

ところで、我々は前節までワルツの運動を例に論じてきたわけだが、この努力は例えば知的努力の最も高い形態である発明 (*invention*) の努力 (ES. 174-176) と異なり、自己創造の努力であるかのように思われる。というのも、ワルツのそれは自分自身に直接関与するものであるように思われるからだ。しかしここで、自己超克・自己創造の内実をはっきりさせておかななくてはならない。獲得されたワルツの運動それ自体は、既に習慣として持っていた歩いたりつま先で立ったりする動作と同様、やはり新たに習慣化されたイメージである。だから、知的努力における自己創造とはむしろこの場合、ワルツの努力によって得られた言わば人格的成長の方を指すものではないだろうか。

これと同じことが、発明のような工作の努力にも言えるはずである。図式とイメージは、既に見てきたように一方向的に作用するのではない。「[……] 心的努力は図式とイメージの間の一連の作用 (*actions*) と反作用 (*réactions*) に存する」(ES. 184)。我々は両者の間を「往復 (*va-et-vient, allées et venues*)」(ES. 182) する。そうであるならば、ものを作る努力においても、作ったものから自己への反作用があるのでなければならない。実際、例えば「小説家や詩人が創作した人物達は、その人物達

が表現することになっている観念や感情に跳ね返ってくる (réagissent)」(ES. 175-176). これはイマージュから図式への作用である。「我々には自分の思想を外的に演じる傾向があり、そしてこの戯れが実現しつつあるという意識は一種のはね返り (ricochet) によって思想そのものに返される (fait retour)」(ES. 184, 強調原文). 創造の努力にはこのような「はね返り」が存在する。「感覚 (sensation) の戯れは表象の戯れに応答し (répond), 表象の戯れと言わば違った調子で反響する (fait écho)」(ES. 183)¹⁶. この意味で、自己とは別の対象を作る工作や表現の努力においても、自己から対象へ、そして対象から自己への往復が存在する。

知性は製作のために製作するのだろうか. それとももしかすると、まるで別のものを心ならずもあるいは意識さえしないで追求しているのではないだろうか. [……] この「知性による物質の」支配が人類にもたらす利益は、確かに発明の物的成果そのものの利益よりも遙かに大きい. 私たちは製作物から直接の利益を引き出すという知的な動物のしそうなことをしているし、発明者もまさにそうした利益のほかは求めなかったのだとしても、そのようなことは発明があらゆる方面に巻き起こし得た新しい考え (idées), 新しい感情 (sentiments) に比べたら取るに足りない. それらの新しいもので私たちを自分自身以上に高め (nous hausser au-dessus de nous-mêmes), それによって私たちの地平を拡げることこそ発明の本質的な結果であるかのように思われる. (EC. 184)

あるものを発明することによって自分自身に新しさがはね返りとして生まれるのであり¹⁷, だからこそ往きと帰りを互いに独立して考えることはで

16 前節で述べた努力の苦しみもまた、感覚的応答である (脚注 13 も参照).

17 このように「知的努力」では、感情の媒介的役割が論じられる. 「意識は「感覚と表象の」真ん中に (milieu) 位置づけられ、中間 (moyenne) をなして、感情 (sentiment) を感覚と表象を媒介する (intérmédiare) 独特な状態に仕立て上げる」(ES. 184). それ故意識や感情は媒介的なものであることになるが、そうだとすれば、「意識の直接与件」の「直接」とは何であるのか. 少なくとも、直接性は媒介を拒絶する、という考え方は再考しなければならないのではないか. ベルクソンにおける直接性と媒介性の関係が改めて問われねばならないだろう.

きないのである。これが努力における媒介としての逆説性である。それ故ワルツの努力や発明の努力が自己超克を可能にすると言えるのである。

このようなわけで、この自己超克は、自己から離れること（＝自己否定）であると同時に、自己への還帰でなければならない。言い換えると、自己から離れることによってしか自己に還ることができないということである¹⁸。第1節で論じた「哲学的直観（intuition philosophique）」の努力は、ここで改めて理解できるだろう。

その哲学者が自分の肯定したことについて意見を変えんとするならば、それもまた自分の直観やイメージに内在する否定の能力によるのです。[……] 実際その哲学者は自分の思想の曲線から離れて接線真っ直ぐ進んだので、自分自身に対して外的に（*extérieur à lui-même*）なったのです。彼は直観に戻る（*revient*）時、自分自身へ帰ります（*rentre*）。この出発（*départs*）と還帰（*retours*）によって、〈発展する〉学説、言い換えれば自己を見失っては自己を取り戻し、自己自身を訂正して（*se corrige*）ゆく学説が作られるのです。（PM. 121）

自分の精神のうちにある哲学的直観を把握するために、哲学者は一生をかけてそれを言葉に表そうとする。ところで、直観というものは概念化を拒絶するものであるといえる。とすると、哲学者が元の直観に辿り着くために学説や理論を展開するという概念化の行為は、むしろ元の直観から離れていることになるが、しかしそれにも拘わらず、そうすることによってしか直観に至ることはできないのである。哲学とは「直観の所与への意識的で反省的な回帰（*retour conscient et réfléchi*）にほかならない」¹⁹。哲学とは、さらに言うとも哲学的生とは、そのような仕方ではありえないのである。

18 これは超越と内在の関係でもある。川瀬雅也はアンリにおける内在と超越の関係をフッサールやベルクソンとの比較を通じて見い出そうとしている。「内在なしに超越が不可能なように、超越なしに内在だけで独立に存在すると考えることもやはり不合理である」（『内在と超越、あるいは純粹持続と現象学的時間』『フッサール研究』第3号、2005年3月、229頁）。また、本論第5節も参照。

19 ベルクソン著『物質と記憶』初版の序文。《Œuvres》, PUF, p. 1491

5 努力における弁証法性

ここまで我々は自己創造、自己超克の努力と、他の対象を創造する努力との関係を明らかにするために、創造の努力における否定性と逆説性の役割に注目してきた。まず、否定性が前提としている置換としての二元性と、「知的努力」における図式とイメージの二元性との重要な連関を見いだした。努力は対立し合う図式とイメージが互いに修正し変容し合いながら和解あるいは合致を目指す試みであり、従ってこの争いは努力にとって本質的なものであるといえる。この知的努力それ自体は対象創造の努力であるが、しかしこの努力によって跳ね返る感情の存在を認め、この限りで自己超克もまた可能になるということを明らかにした。これが意味するのは、自己超克という在り方が媒介的にしかありえないということ、この媒介とは逆説であること、この逆説は置換としての否定の二元性であるということである。

このように、我々はベルクソンの努力論において弁証法的性格を根本的なものとして認めてきた。しかしながら、ベルクソンの哲学は一般に反弁証法として理解されているように思われる。恐らくその理由の一つは、ベルクソン自身が直接弁証法批判を展開していることにある。そこで、そのような批判におけるベルクソンの意図を把握することにしたい。

結論から言うと、ベルクソンが「弁証法」として非難するのは、経験から乖離した極端な *conceptualisme* あるいは *verbalisme* である。

自我は多様であるとか、自我は統一であるとか、自我は多様と統一の綜合 (*synthèse*) であるとか言うほど簡単なことはない。そういう統一や多様は、わざわざ対象に合わせて寸法をとる必要もなく、すでに出来上がっていて、ひと山のなかから選び出しさえすれば良い表象であって、ピエールとポールのどちらの形も表していないからこそ、どちらにも合う既製服なのである。しかし、経験論の名にふさわしい、寸法をとって仕事をする経験論は、その研究する新しい対象の一つひとつに対して全く新しい努力を加えなければならない。(PM. 196-197)

論理的に結論を延長し、自分の研究範囲を事象的に拡大せずにその結論を他の対象に適用することは、人間の精神にとって自然な傾向であるが、しかしこれに決して屈してはならない。哲学が純粋な弁証法、言い換えれば言語のうちに蓄えられている初步的な認識でもって形而上学を構築する試みであるとき、哲学はそのままそれに屈服してしまう。哲学は、ある事実から引き出したある結論を残りの事象に適用しうる〈一般原理〉に仕立てあげるときにも、絶えずそうしてしまうのである。こうした哲学の方法に対して、我々の全ての哲学的活動は一つの抗議 (protestation) であった。(PM. 98)

我々が弁証法を読み込むのは、まさにこの「抗議」の努力においてなのだ。一方ベルクソンが批判するのは、対象を言わば抽象的、形式的にしか把握できないような弁証法であり、「抽象的な概念の運動」²⁰としての弁証法なのである。

だが、我々がこれまで論じてきた努力における弁証法がそのようなものではないことは明らかである。「全ての心的努力は、確かに一つの観念に向かう (monoidéisme) 傾向である。しかし、精神が進む統一は抽象的で乾いた、空虚な統一ではない。それは組織化される多くの要素に共通する〈指導的観念〉の統一である。これは生の統一そのものなのだ」(ES. 186)。「図式は我々が既成のもの (*tout fait*) として静的な状態で (*à l'état*

20 Deleuze, *Le Bergsonisme*, Quadrige, 1966, p. 38

ドゥルーズはまさにこうした弁証法理解の下で、ベルクソンを反弁証法として読む。つまり、対立を本質的なものとして見ないのである。「対立したものの結合は何も我々に語らない。それが作る網は大ざっぱ過ぎて、全てが逃げてしまうからだ」(op. cit., p. 39)。そこでドゥルーズは、ベルクソンにおける対立や否定を解消して、本性の差異 (*différence de nature*) を見いだすのである。「存在の中に差異は存在するが、否定的なものは何もない。すなわち、否定は常にあまりにも一般的な抽象概念を含んでいる。実際、あらゆる否定に共通の根は何だろうか。我々は既にその根を見た。つまり、二つの秩序、二つの存在の間の本性上の差異から出発する代わりに、秩序または存在についての一般観念が作られるのである。この観念は、[……] 我々を無秩序一般、非存在一般へと導く一つの下落の出発点としてしか措定できないのである」(op. cit., pp. 41-42)。これに対し我々はベルクソンが批判するような弁証法とは別の弁証法を、彼の努力論において見た。すなわち、努力とは対立や逆説を本質としていること、闘いの生であるということである。

statique) イメージに与えたものを、動的に (dynamiquement) 生成 (devenir) の形で表す」(ES. 188, 強調原文)。我々が弁証法という言葉で示したいのは、努力におけるこのような生ける統一の運動、すなわち図式とイメージの争いそのものである。それ故否定の二元性を単なる二重の肯定としてではなく、このような統一を目指す対立的、闘争的運動として読み込む限りにおいて、「知的努力」に内在する否定性と弁証法性の意義を認めることができるだろう。さらにそれだけではない。創造、表現の努力である知的努力にとって、それが成功するということは確かに図式をイメージへ展開することにあるといえるが (cf., ES. 167, 190etc.), しかしそのような一方向的な移行しか問題にしないのであれば、やはりそれもまた同様に努力における重要な争いの場を取り逃していることになる²¹。ベルクソンが図式からイメージへ方向を本質的なものとみなすのは、あくまで表現や創造の構造的説明をするためにすぎない。より重要な問題は、表現の努力、創造の努力という努力する生の在り方であるということ忘れてはならないだろう。

しかしそうは言っても、やはり未だ次の疑問は拭いきれていないのではないだろうか。すなわち、ベルクソンは「知的努力」において否定性には言及していないし、さらには創造のいかなる場面においても弁証法ということ語っていない以上、この哲学者に弁証法や否定性を積極的に認めるわけにはいかないのではないだろうか、そうでなければ、どうしてベルクソンが弁証法という言葉在意義のある仕方で語らなかったのかが理解できなくなるではないか²²。

21 例えばムレロス (Mourélos) は動的図式とイメージの関係をベルクソン哲学の本質として読み込んでいるが、彼も同様に図式からイメージへの移行しか問題にしていない。それ故彼のベルクソン理解は反弁証法的である。 *Begson et les niveaux de réalité*, PUF, 1964, pp. 62, 160, 203, etc..

22 ただし、矛盾したようではあるが、こうした疑問がある一方で、ベルクソンに対して「弁証法」という表現を用いた哲学者は意外に多いことも事実である。例えば西田幾多郎 (いわゆる後期の哲学)、田辺元、三木清といった日本の哲学者や、既に少し触れたジャンケレヴィッチやバシュラル等が挙げられる。確かに我々は彼らに対する関心を否定するものではなく、今後の課題としてもいづれ取り組まねばならないのであるが、しかし彼らがそれぞれいかなる意味で「弁証法」という言葉を用いているかは大いに問題とされねばならないし、単に思想史上の背景として網羅的な把握をするだけでは意味のあるものにはならないだろう。彼らの読解の比較検討を実りあるものにするためにも、やはり本論文においてベルクソンの努力論の本質を掴むことが最優先されるべきであると思われる。

確かにこのような疑問が生じることは或る意味当然のことであるように思われるが、それでもこうした疑問をする場合には注意しておかねばならないことがある。まずこの点から述べておきたい。すなわち、そもそもベルクソンが弁証法や否定性という言葉を経験的に使っていないという理由で、それらの可能性を認めないということが許されるならば、哲学とは一体何をしていることになるのだろうか。もし仮にこのような理由が正当なものとして認められるとすれば、我々に課されているのはテキストの要約と整理の作業でしかありえないことになってしまう。しかしかといって、我々はテキストから多少強引にでも拡大解釈をすべきだと言いたいのももちろんない。我々がすべきことは、努力論におけるベルクソンの「哲学的直観」を、「的確さ (précision)」(PM. 1) を以てロゴス化するということでなければならない。

以上の了解の下で、我々はベルクソンの直観を弁証法という言葉で言い表すことを企てた。そして、努力の様相をこの言葉で表すことによって最も問題としたいのは、一種の止揚によって最終的に絶対精神に行き着くというような事態ではない。そうではなくて、努力は逆説的な在り方をする、ということなのである。否定の二重性はまさにこの逆説性を表していた。これは図式とイメージの関係においても例外ではない。ワルツの例で見たように、イメージを修正し利用するということは、そのイメージが有益でもあると同時に障害でもあるということである。つまり「修正」や「利用」には、物質における道具と障害の関係と同様の両義性、すなわち逆説性が含意されているのである。従って、図式とイメージの争いは単なる二項対立ではない。図式とイメージの二元性を単に二重の肯定とみなして済ませることは、この逆説性を解消させてしまうことになるのであり、その結果、努力そのものである争いの場面の核心を掴み損ねることになるのである。そしてこのことは知的努力だけでなく、知的努力と自己超克の努力との関連においても言うことができる。他のものを創造することによって自己創造が可能になるという逆説性は、やはり対立を本質的と見るからである。自己超克は、自己自身にしか関与しないという点で直接的なものであり、それ故他者は自己超克にとって障害であるにも拘わらず、他者である物質を媒介するのでなければ自己超克はありえない。自己によ

る自己の創造という直接性は、物質性による媒介²³あるいは対象の創造という媒介を条件とするのである。このように、努力において直接性と媒介性は逆説的な関係にあり、矛盾するものであるが、しかしまさにそうであるからこそ、努力は努力たりえるのである。自己超克に潜在する虚辞のneとしての否定性は、自己超克の枠内で思考するだけでは主題化されない。この否定性は、対象創造との関係において明示される。否定性としての置換は、この媒介性と逆説性を意味するのである。以上のことから、逆説性によって突き動かされる努力の運動を、弁証法と名づけることが許されるのではないだろうか。

このようなわけで、我々は本論文の副題に「弁証法」という言葉を用いたが、しかし本論文において論じてきたのはあくまでベルクソンの努力論における弁証法性であって、ベルクソン哲学全体にまでそれを引き伸ばして解釈してはならないだろう。とすると、以下の課題が残されたことになるだろう。すなわち、ベルクソン哲学にとって弁証法は努力論のような一側面に見られるに過ぎないものなのか、あるいは、ベルクソン哲学全体に言えることなのか——。これは非常に大きな問いであるが、しかしこの問いとは別に、我々は議論の途中で、幾つか個別的問題を提起してきた。それらはいずれも、いわゆる一般的なベルクソン理解に対する再考を促すものである。これらの問いが、ベルクソンにおける弁証法性に対する示唆を与えてくれるに違いない。

最後にもう一つ述べておきたいことがある。ここまで、我々は努力の問題に対して絶えず二元論的に取り組んできた。自己超克の努力における否定と逆説の役割に注目することによって、その二元論的構造を明らかにした。二元論とは、文字通り二つの異なる原理があることを意味しており、それ故実在論とか観念論とか、認識論とか存在論といった括り方は不可能である。つまり、この自己超克という生の在り方は、単なる実在論でも観

23 これは生命進化の努力も例外ではない。「生命の全歴史は、これまで、物質を持ち上げようとする意識の努力の歴史であり、また物質が意識の上に再落下して多少とも意識が完全に押し潰された歴史であった。企てが逆説的 (paradoxale) なのであった [……]。問題は必然性そのものである物質で自由の道具を創造すること、機械論に打ち克つ機械を製作すること、自然の決定論を使ってその決定論が張り巡らせた網の目をくぐり抜けることであった」(EC. 264)。

念論でもないし、存在論でも認識論でもない。ところで、ベルクソンにおいてはこの努力という場面において、生の哲学としての価値を認めることができるだろう。この哲学者にとって価値を問題にするということは、このように二元論という場面でしか語れないように思われるのである。自己超越としての努力の価値は、いわゆる新カント派のように、事実と価値を分離して価値そのものの客観性を定立しようとするやり方とは違っている。しかしかといって、イギリス功利主義のように、快楽を求め苦痛を避けるという人間の本性に基づいて考えられたわけでもない。さらに言うと、トマスのように存在するということ自体に既に価値を認めてしまうわけでもない。従って、ベルクソンにおける自己超越としての努力の問題は、価値論的にも独自性を認めることができるであろう。こうした点から二元論を捉え直す試みが、我々には課せられているのではないだろうか²⁴。

凡 例

ベルクソンからの引用について

ベルクソンの著作からの引用時に用いた略号は以下の通り。頁付けは *Quadrige* 版に基づく。それぞれ初版年を合わせて記す。

- MM *Matière et mémoire*, 1896
- EC *L'Évolution créatrice*, 1907
- ES *L'Énergie spirituelle*, 1919
- MR *Les Deux sources de la morale et de la religion*, 1932
- PM *La Pensée et le mouvant*, 1934

それ以外の著作について

論者が使用したメルロ＝ポンティの *Phénoménologie de la perception* は、2005 年版のものであるが、これはそれ以前の従来版の頁付けとの間にずれがあるので、両方の頁を明記した。

²⁴ 本稿は、東京都立大学哲学会第 32 回研究発表大会（2008 年 7 月 12 日）における発表の内容を、新たな構想の下に練り直したものである。